育てよう 鏡野のよい子シリーズ

「コロナ禍に思う優しさと思いやり」

今、日本は、いや世界中がコロナウイルスの感染拡大の中で、未曾有の経験をしています。学校現場も例外ではなく、行事の変更を始めとした感染対策など、様々な対応を迫られています。

このような中で、今、私が一番気になり心を痛めていることが、世の中で起きている感染者に対する差別の問題です。感染者に対して必要以上に恐れたり、詮索したり、心ない言葉を投げかけたりする事例がニュースなどの報道で紹介されています。懸命に私達の生命を守るために、最前線で戦っている医療従事者の方に対してまでそのような事が起きていることを聞くと本当に心が痛みます。

日本赤十字社のホームページでは、病気への感染だけではなく「不安」や「差別」といったいわゆる「心の感染」を紹介し、そのような事にならないよう呼びかけています。そのためには、『聴く力』をもつことなど、落ち着いて、確かな情報をもとに行動すること、差別的な言動に同調しないことなどをあげています。さらに、その上で想像力をもち、今の状況に対応している全ての人々に敬意やねぎらいの気持ちをもつことなどもあげています。香々美小学校のあおぞら学級でも、この『三つの感染※』について学習し、ポスター作りに取り組みました。

『真実を見つめる力』や『想像する力』をもち、『優しさや思いやりの心を育む』、まさに学校教育でも大切にして取り組んでいる課題です。その事が差別や偏見を許さない心を育てることを思うと、学校教育の責任を痛感しているところです。

さて、香々美小学校の子どもたちを見てみると、思いやりや優しさで、差別や偏見を生まない未来を信じることができます。普段の生活の中でちょっとしたけんかなどはあっても、相手をひどく傷つける悪口や、差別的な悪口をほとんど聞いたことがありません。支援学級の子どもたちに対しても同じです。

そして、上学年が、下学年の子どもたちに対してとても優しく、よくかかわります。縦割り班の活動や通学班などでもよく声をかけ、休み時間には学年に関係なく遊んでいる姿もよく見ます。

こんなこともありました。ある時、通学班の低学年の子どもが登校中に誤って用水路に落ちてしまいました。その時、通学班長が自らも冬の用水路に入って助けたのです。周りの子どもたちはその間にすぐに学校に知らせに来ました。保護者の方もすぐに車で二人を乗せて一旦家に送ってくださり、事なきを得ました。

子どもたちは、信頼できる大人、家庭や地域の方々の温かいまなざしの中で大切に育てられ、自然に人を思いやり、かかわることができているのではないかと思います。

そのような子どもたちを見ていると、つらい状況にいる人に自然と手を差し伸べ、決して差別や偏見を許さない世の中・地域社会を創ってくれる、そんな未来を信じることができる気がしています。

鏡野町生徒指導推進連絡協議会
香々美小学校　三木　章

※「三つの感染」・・・1病気が不安を呼び、2不安が差別を生み、3差別がさらなる病気の拡散に繋がること。

のびのびひろば

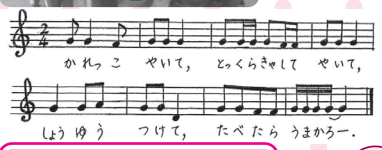
（鶴喜保育園）

「何でも自分でやってみよう!」～考え、伝え、一歩前へ～

♪わらべうたであそぼ♪

昔から歌い継がれてきた『わらべうた』、子どもたちはわらべうたの優しいメロディやリズム、動きをすぐに覚え楽しんでいます。小さい組のお友だちは保護者と顔を見合わせながら触れ合いを、大きい組のお友だちは友だちと一緒に「こんなのはどう?」「今度はこれでしたい!」とアイディアを出し合い、遊びをアレンジしています。

また鶴喜保育園では、月に一度、わらべうたの赤松先生に、季節や子どもたちの興味や発達に応じたわらべうたや絵本を教えていただいています。



『かれっこ』を
食べたいものに『○○こ』と
言い換えて遊べます。